

春日野にて

柴

舟

にはかにも月の光の中に来つ千とせの杉の影をふみつつ  
露じめる真袖たれつ、赤人も憶良もかゝる月に立ちけむ  
てる月の光となりて降りくらし古人のうれひよろこび  
夜の氣も月の光もち沈み動かぬ中にさをしかなかくも  
露ながらふむや芝草よき人のうたひなげかひふみし芝草  
今千歳後に生れてこゝに來て誰か月みる我とひとしく  
赤裳ひき手玉ならして露白き月の芝原來む人もあれ  
鹿の音のなごりはるくひゞきゆく大野隈なくてる月夜かな  
さしいで、月をうけたる枝ばかり白きもかなし夜半の神杉  
てる月の前にぬぐひつはてもなきししまの中におつる涙を

龍雲山莊十小記

劍堂 細田謙藏 撰

四大草堂開豁

東海水之大。駿之岩淵爲最。岩淵之勝。龍雲山莊爲最。山莊之勝。四大草堂爲最。堂位山頂。公高會賓友一處。茅屋采椽。高不過常。廣劣倍丈。而眺矚開豁。物無遁形。富士河發源信州。穿千山萬壑而來。馳突犇駛。至是灌注肆大。汪々湯々。而爲草堂之流泉。駿海紺碧。與天一色。浩々渺々。而爲草堂之清池。壓河臨海。巍々焉擡首於蒼穹之表。而大麓寬衍斜博。跨數州者。蓮岳也。而爲草堂之牆壁庭除。山水之大如是。而草堂以領略之。此其所以最于岩淵。于山莊也。因名曰四大草堂。有客曰。四大謂地水火風。地水火風何處無之。以名亭者何也。余笑曰。否。夫蓮岳也。駿海也。富士河也。三者物三大者也。而公昔爲提封之君。今爲朝廷大臣。夫齊雲飛翼樓名何曾不能構。而不爲。掌舞掌上舞。肉屏楊國忠爲肉屏何曾不能致。而不取。使令則一減一獲。居則茅屋采椽。貴而不驕。富而能儉。是

雨亭曰。頌中實規妙。

其德亦不可謂不大焉。蓋非草堂不能領略三大。非公不足以爲三大之主。合而名之曰四大。非地水火風之謂也。唯夕而退。遂並書以爲記。

鳳洲曰、文亦汪洋湯々、又曰、末局收拾有法、

雨亭曰、筆勢亦大、可以記四大草堂矣、

遠湖曰、三大形也、實也一大、心也虛也、本非可合說、而能湊合如此、可謂三妙技矣、

### 瀟堂奇構

相公多奇想。其設瀟堂亦然。堂在草堂廡下。垣挺爲竈。後壁穿突。使炎烟散外。竈中擱大鏗。々々中箱大籃。々々大洋布。人在布中。溫藉坐湯。心氣暢快。不可言。而保公創意。其奇概類此。但山上無水。僕汲山下。櫛々擔上。謙日淅洛。旣佩主人之辱。又憐力人之勞。不獨感其奇云。

鳳洲曰、此篇以奇字爲眼、

雨亭曰、一結推開、憐力人之勞。寫奇而不離正、君子之心也、

遠湖曰、簡淡可喜、

### 覽古亭興懷

草堂之鄰。松杉之間。微露屋頂。望之宛然仙宮者。爲覽古亭。亭本函嶺竹下民舍相傳。建武中。王師東征炊糧處。相公愛其古。購以移此。而備公餘燕息。棟梁之煤紋。柱桷之蟲篆。真七百年物。稍修破敗。務存舊觀。謙到日適成。壁則墜之。席則蒲之。凶則割成巨鐘之狀。瀟灑澹雅。古色襲人。公舉杯屬曰。賓至而亭成。

中洲曰更進一層妙

請一酌以落之。亭遠望八幡山。爲源陸州行軍處。近俯富士河。爲平中將聞水禽而奔處。而久能太平諸山隱見出沒於雲烟縹緲之間。是皆近古群雄之所睥睨而馳騁者矣。乃致言曰。夫坐古亭。覽古跡。考古人成敗興亡。而思今日郵治所繇。未必不爲相公輔治承化之資。矧元弘中興變爲建武之亂。公坐覽柱桷之蟲篆。憶當時將士瘡痍斑々之慘。仰覽棟梁之煤紋。想炊烟浮々之外。千軍萬馬。劍戟相摩之狀。起居寤寐之際。無忘慎終如始治而思亂之戒。則是亭也。奚啻燕息之具而已哉。

又曰致言不徒

中洲曰、以古爲字眼、不見題目、知覽古亭、

鳳洲曰、發揮覽古二字、遂說及今日郵隆所由、錯綜照映、文思尤佳、



激。瀾。雪。山。疊。帆。如。鷗。舟。如。葉。葉。外。雲。烟。何。奇。絕。乾。坤。變。幻。又。詭。譎。晴。交。陰。明。仍。滅。君。不。見。駿。南。風。光。得。莊。真。莊。外。勝。概。入。閣。新。相。公。風。流。公。退。後。憑。欄。四。矚。逸。興。伸。江。流。爲。酒。海。爲。盞。排。雲。欲。獻。蓮。岳。神。許。我。來。攀。雲。外。碧。紫。烟。散。盡。天。宇。濶。爲。賦。長。句。試。朗。吟。恍。然。躬。化。羽。衣。客。

中洲曰、用歌記景、變得好、

鳳洲曰、記開天閣、則以古詩、用筆有變化、詩亦長短錯落、可喜、

雨亭曰、古調一篇、句有長短、節有緩急、沈實似少陵、豪放如青蓮、是歌行尤佳者、

遠湖曰、長歌一篇、窮極筆力、怪偉奇絕、超忽縹緲、讀之、使人飄揚欲仙、

### 富川長橋

富士河沿岳麓。洋々入海。兩岸數里。不辨牛馬。稍上。鐵橋架焉。長一萬八千尺。蜿蜒如龍。草堂望之。近在目睫。長橋臥波。未雲何龍。於今知此句之妙。

雨亭曰、引古語代評語、不多費詞妙、

遠湖曰、拈出古句、不多費詞、却有餘音、

### 駿海濤聲

覽古亭下。駿海渺然。田子三保諸勝。百里一目。夜深人定。濤聲與松濤相和。颼々。鞞々。如琴如雷。使人發羈愁。

雨亭曰、寫色、寫景、又寫聲、僅々四十二字、可抵敵長篇、

遠湖曰、清絕冷絕、

### 山村夜燈

暮色蒼然。出庭而望。則落霞橫空。澹々蕩々。大麓之下。孤村燈火。點々耿々。與岩淵街燈。遐邇相映。如螢火散飛。蘆蒲間。亦奇亦幽。

雨亭曰、烟霏未收、燈火既上、黃昏光景、髣髴在目、

遠湖曰、寥寥數句、廣重畫景、亦不能及焉、

### 蓮岳朝暎

旭曦未出海。而岳巔先受光。白雪變紅雪。照映四方。成紅世界。公呼曰紅芙蓉。既而日升三竿。紅漸淡。紅雪復爲白雪。照映四方。成銀世界。又呼曰白芙蓉。

謙屢觀<sub>二</sub>白芙蓉<sub>一</sub>。更欲<sub>レ</sub>觀<sub>二</sub>紅芙蓉<sub>一</sub>。每旦早起。或坐<sub>レ</sub>堂。或上<sub>レ</sub>閣。而凝望。則雲鎖烟遮。終不能<sub>レ</sub>觀。是爲可<sub>レ</sub>恨己。蓋謙此行。屬<sub>二</sub>草木向榮之時<sub>一</sub>。至於涼風繁陰。紅葉皎月。與<sub>レ</sub>夫寒濤雪岳。光景超忽。千態萬狀者。皆未<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>之。不<sub>レ</sub>獨紅芙蓉而已。佗日重追陪記<sub>レ</sub>之。未<sub>レ</sub>暮也。

中洲曰、杜詩所謂海月生<sub>二</sub>殘夜<sub>一</sub>者、

鳳洲曰、此景、前人未<sub>二</sub>道破<sub>一</sub>、

雨亭曰、以一恨事成<sub>レ</sub>倍、更推<sub>二</sub>開一步<sub>一</sub>、情景兩有<sub>二</sub>不盡之妙<sub>一</sub>、與柳子石澗記結法、相似、

中洲又曰、十記、每篇叙法變化、是眩惑人目、而文線則處々出沒、以一貫<sub>レ</sub>之、猶<sub>レ</sub>

龍雲變幻不可<sub>レ</sub>測、而爪鱗隱見、以<sub>二</sub>首尾<sub>一</sub>相應、不<sub>レ</sub>負<sub>二</sub>龍雲莊記<sub>一</sub>、

鳳洲又曰、筆墨精到、毫無<sub>二</sub>遺漏<sub>一</sub>、讀<sub>二</sub>此十記<sub>一</sub>、猶<sub>二</sub>親睹<sub>二</sub>龍雲山莊<sub>一</sub>也、

## 教育者たらんごする我等

文三 こと よ

「汝は近き未來に於て國民の教育者たらんとするに非ずや。」靜かに己が將來に向ひて思慮したるとき我が耳にはかゝる聲の囁くを覺えて、轉た其の任の大なるに平然たる能はざるなり。

それ世は今や數星霜の争闘をおさめて、こゝに始めて靜かなる冬をむかへんとせり。四歳にわたりたるこの大戦に於て湮滅したる生命や果して幾何。死するものは死し、亡ぶるものは亡び、今や交戦國の生面は、こゝに新しき期にむかつて展開せんとせり。而して數年にわたるすべての犠牲は交戦國民をして新しき生涯に入らしむべき大なる能力を生せしめたり。彼等はこれによりて新しく生くべき世界の如何なるものかを知り、且つそれに向つて自ら如何に生くべきかをも知れり。疑ひもなく有形無形のものに於きて過去四年間の消耗は、彼等に對して少なからざる疲労と打撃を來したりとはいへ、されど將來に於ける彼等の恢復は更に恐るべきものなる事

を忘るべからず。

されば今日は我等の袖手傍觀すべきの時にあらず。茲に於て教育者たらんとするもの、其の責の大にして且つ重なるを覺えざる能はざるなり。一國の盛衰は教育に俟たずして何にかまつべき。教育の善否は其の國勢を左右して餘りあり。國民の明晰なる頭腦と確乎たる自覺の上に立つは世界的存在の第一義ならずや。見よかの獨逸を。彼にしてもし國民に自覺あらずらせば、いかでかかゝる長年月に互り、その活動をなし得んや。彼等は個人主義なり。されど共に彼等は彼等の自己尊重、換言すれば彼等は自ら自己の價値を認めたり。彼等の舉動は各、自發的にて、其の發するところには明かに強き自覺あり。即ち彼等は科學的基礎の上に立ちて、十分に其の能率を發揮したり。これ皆教育の結果にあらずして何ぞや。

あゝ、我等は如何なる覺悟をもつてこの教育てふ重くして大なる事業を擔ひて立たんとせるか。世は益々我等に大なる要求を以て待たんとせり。我國が今日列國の進歩發達に後れず、且將來に於いて爲すあらんとせば、教育事業に従事せんとする我等も大